Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-07

デュルケーム『宗教生活の基本形態』

金，瑛

(Citation)
社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:52

(Issue Date)
2022-06-30

(Resource Type)
research report

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009408

コラム１　デュルケーム『宗教生活の基本形態』

金瑛

デュルケームの『宗教生活の基本形態』（1912）は、オーストラリア先住民の原始的な社会における宗教トーテミスムを研究することによって、宗教と社会の関係を考察した著作である。「聖／俗」の区別、「集合的沸騰」という概念、E・ゴフマンにもつながる儀礼論などが、社会学では有名であろう。

一見すると時間が主題ではないこの著作が社会学的な時間論の嚆矢としてしばしば言及されるのは、時間をカテゴリーの一つとして、それも先験的なものではなく社会的に構成されるものとして論じた序論における認識理論が、時間論に大きなブレイクスルーをもたらしたからである。社会学分野以外への影響としては、主に人類学の領域において、エヴァンス＝プリチャード、レヴィ＝ストロース、E・リーチらにも大きな影響を与えたことが知られており、時間論の古典の一つであると言って差し支えないだろう（Alfred Gell, 1992, *The Anthropology of Time*, Berg.）。

だが一方で、現在の自然科学的な知見を踏まえた時間の社会理論（B・アダムや J・アーリなど）においては、その「時間の社会的相対論」（社会構造に相関して時間も変化する）という主張が、人間の社会のみに視点が限定されているとして批判の対象ともなってきた（本書第 2 章参照）。近年話題となった理論物理学者カルロ・ロヴェッリの『時間は存在しない』（原著 2017 年）の中でも、デュルケームの議論を時の経過という直接的な経験にまで拡張することは難しいといった指摘もなされており、時間論の刷新とともにその議論の時代的な制約が数多く指摘されてもいる（『時間は存在しない』NHK 出版、2019 年、第 12 章原注 17）。

ただし、「時間の社会学」という観点からすれば、その議論から学び直すことはいまだに多い。T・パーソンズが指摘しているように、デュルケームの宗教論の核心は「社会が宗教現象である」という社会の観念的特性を読み取ったことにあり、それは宗教論に留まらない広い射程を有している（『社会的行為の構造　第 3 分冊　デュルケーム論』木鐸社、1982 年）。なぜデュルケームは宗教論という文脈で時間論を展開する必要があったのか、時間論におけるその理論的貢献は何か。この問いにはまだ十分な答えは出ていない。